

氏 名 かまた 鎌田 かをり

学 位 博士（芸術学）

学 位 記 番 号 博（芸）甲第34号

学位授与年月日 平成29年3月17日

学位授与の要件 学位規程第3条第3項該当

論 文 題 目 名 茶の湯のコミュニケーション  
一言語よりも非言語

審 査 委 員 主査 山口 義久

副査 櫻木 晃彦

同 ホルスト・ヘンネマン

## 1、論文内容の要旨

本研究の要旨は以下の通りである。

茶という嗜好品を喫するのは人間だけであり、他の動物には見られない。言語もまた人間と他の動物を分ける決定的な指標であり、言語を使用していることが人間である証しだと言える。茶と言語には共通性があり、ともに文化の所産である。

個別の言語としての日本語に焦点を当てると、省略・緩和表現といった特徴が見られ、茶の湯との共通性が認められる。日本語には主題・述語の省略、人が表れない表現がよく見られ、送り手と受け手が相手と一体化したかのように同調していることがある。省略することによって却って送り手の意が伝わり、奥床しさ・余韻といった美点を生み出す。茶の湯も同様である。書院台子茶から侘び茶への変遷はまさに省略の美と言える。また、亭主はもてなしの意を言葉なしに、むしろ所作・道具といった非言語を通じて表す。

緩和表現も日本語の特徴であって、われわれは明確に述べることを避け、あからさまではないことをよしとし、そこに一種の美を感じることもある。茶の湯においても、所作は仰々しくなく控えめに、さりげなく行うのが望ましいとされる。これは言語における緩和表現に対応するものとみなすことができる。

日本人が話すことを重んじないことは、日本語ではコンテキストが重要だということでもある。すなわち、コミュニケーションの当事者が共有する情報が多ければ、言語の使用は少なくなるのである。このことは、西欧と比較すると違いが際立つ。また、平成 23～26 年度の「国語に関する世論調査」からも、日本人は正確なコミュニケーションよりもむしろ、人間関係の維持を大切に考えていることが見えてくる。

言語をあまり使わない「ハイ・コンテキスト」文化では、言語よりも非言語が重きを成すことが示唆されるが、茶の湯でも同様だと考えられる。茶の湯のコミュニケーションとは、言葉・所作・道具等を介して、主客間で意味を共有するプロセスである。

茶の湯におけるコミュニケーションの非言語性は、戦国時代にも見ることができる。戦国時代の茶の湯は、言葉による情報伝達の間という側面ももちながら、非言語コミュニケーションの間でもあった。もの言わぬ名物茶器に、為政者は多くを語らせていたと考えられる。たとえば、信長は、名物茶器を見せる

ことによって茶席の客を圧倒し、ひいては織田政権への服従へと導いた。秀吉も同様に、初花肩衝等、信長拝領の名物茶器を用いることによって、自分が信長の後継者であるとライバルたちに示し、天皇・大名・豪商・名うての茶人たちにも自己の権力を誇示したと考えられる。非言語メッセージが言語よりも多くを訴えたのである。

茶事の流れに沿って見ても、言語よりも非言語に託されている要素がはるかに多い。点前の所作や道具を通じて、また五感の働きという非言語的要素を利用して、亭主は季節感や茶事の各場面の意味を客に伝えようとする。その根本にあるのはもてなしの意であり、これを亭主は言葉なしに客に伝え、客はそれをくみ取る。

茶事における非言語コミュニケーションの極致とも言うべきものは、茶事の始まりと終わりに見られる。露地での迎え付けの場面で亭主と客は初めて顔を合わせる。亭主は思いを胸に、ただ無言の一礼をする。客の方も思いを口にせず、黙礼のみを行う。この非言語行為に深いコミュニケーションが通い合う。茶事の終わりも同様に、客が露地に出て振り返ると、亭主は躡り口に坐って黙礼し、客も応じて礼をする。どちらも万感の思いをもちながら口にせず、礼をもってお互いが無言で伝え合うのである。

言語を用いてもコミュニケーションの成立が難しい一方で、茶の湯では、言語を用いなくてもコミュニケーションは成立しうる。しかし、この成立には、侘びの心を具えることが要求され、それを姿に表すという、きわめて難しい条件が伴う。そこには、亭主と客の心のあり方が深く関わってくる。

「感応道交」という仏教用語がある。仏と人間の気持が通じ合う、人が仏法を聞いて心が動き出し、仏もそれに気づいて応化し、相互が通じて融合することを指す。いわば仏と人とのコミュニケーションである。茶の湯におけるコミュニケーションも、この感応道交と共通している。侘びの心をもって、語り合うのではなく通じ合うのである。言語よりもむしろ非言語を通じて、亭主は多くを伝え、客は受け入れるのである。

言語と茶の湯、とりわけ日本語と茶の湯の共通性は、どちらも心を伝えることにある。亭主のもてなしの背景には、所作などの「姿」に「心」を託す稽古と、その「心」を「姿」に表す実践を重ねて、いわば「姿から心へ」「心から姿へ」の繰り返しによって螺旋状に高みへ臨む修行があるが、茶の湯では、これが主客間の「心から心へ」のコミュニケーションとして実現されるのである。

そして、言語よりも非言語が重きをなす茶の湯のコミュニケーションが最終的にもたらずものは、共生である。亭主と客が心を合わせて、同じ世界を共有し、茶の湯の世界で共生する。そこでは相手と自分が、ある意味で一体になり、共に生きるのである。コミュニケーションという言葉が、「共通の」を意味するラテン語の 'communis'、さらには「共有する」を意味する 'communicare' に起源を発しているということも、茶の湯について考察すれば、心から納得できることとなる。

## 2、 学位審査結果の要旨

### 1) 研究テーマの独自性

茶の湯が日本の文化的伝統に根ざしていることは、すでに多くの人びとによって論じられているが、本研究の特色は、茶の湯の意義をコミュニケーションという観点から捉え、とりわけ非言語的コミュニケーションとして性格付ける点にある。その視点からの分析により、コンテクスト依存度の高い日本語・日本文化との茶の湯の同質性を指摘している点は評価に値する。

### 2) 研究方法とその成果

本研究は、扱う問題が広範にわたるため、コミュニケーション学やさまざまな言語に関する本を含む、多数の文献を渉猟することによって遂行されているのが特徴である。しかも、その文献の中で道を失うことなく、独自の論理を通し、茶の湯のコミュニケーションの様々な位相を明らかにしたことは評価に値する。

### 3) 残された課題

茶の湯の非言語的側面をコンテクスト依存度の高さと関係付ける視点は、そこにはどのようなコンテクストすなわち暗黙の了解があるのか、ひいては日本文化の背景にあるコンテクストとは何なのかといった、さまざまな問題を生む。本研究がそれらを余すところなく論じているとは言えない。しかし、新たな視点が新たな問題を生むことは、その視点が含み持つ可能性の証左とも言えよう。

## 3、 最終審査結果

以上、本研究が備えている独創性、文献を活用する研究方法、筋の通った論理構成という三つの観点から検討した結果、審査委員一同、一致して本研究が博士の学位論文の水準に到達していると結論付けた。